WASON
HQ
1104
J74

Sept. 22
1888
No. 128

The Woman's Magazine

女學雜誌

版權所有　　一冊五錢

各土曜日出版　　當府内無郵税

明治廿一年　(第百貳拾八號)　九月廿二日發

社説
理想の紳士(其四)

論説
妻君の資格(紅雨亭一枝)○婦人の文章(中島俊子)

批評
洋服案の討議○ラッベエブラルド氏、女子教育

叢話
クレブランド夫人は流行の母乎○女學校に於ける、聖書佛經の諳誦○泰西美術小話(美妙齋)

小説
哲女の眷○さすがに双紙(美妙齋)

佳傳
魯國の孝女エリサベツス、ロプウロツフ孃

寄書

新報

外報

小供談

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 128. SEPTEMBER 22ND, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Beau (No IV), The Genuine Gentleman.

LEADING ARTICLES:— True Character of Wife (No IV), by Koutei. Women as Writers, by Mrs. T. Nakasima.

CRITICAL NOTES:— " A Debate on Dress-question. " L'abb/e Evrard/s Woman's Education."

MISCELLANIES:— Is Mrs. Cleveland the Mother of Fashions? Reciting of Scripture in Girl's Schools. Western Fine Arts.

NOVELS:— "Tetsujo no Maki." "Sasugani."

CORRESPON DENCES.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

婦人會員の會讀及戸内の獨學に適せり

蓋し最良の教科書

通信女學 第拾二巻 發兌

來二十四日出版すべし

一冊枚數七十頁 定價廿錢全國無郵税

●珊瑚の珠 （第七十八回）

○貴人の妻を北の方とも云ふと男は陽なり女は陰なり南は陽なり北は陰なり表は陽なり奥は陰なり女は奥に引こもり居て内所の諸事を取はからふゆへ北の方とも北の政所とも云ふなり政所は諸事を取計ふ役處を云ふなり。（貞丈雑記）

○賤き者の妻を人より稱してかみ様と云ふと古今相違せり古は貴人の妻を稱して上さまといひしなり女官餝抄の奥書よ此本前一條殿（攝政殿）室町殿の上さまへしるしてまいらせられ候を寫留て候云々又蜷川記殿中日記に（蜷川新右衛門少尉宮道親元日記）寛正六年正月十日の條に（御供二番）同上様（御供五人）貴殿北小路亭御風呂時宜具に御成方記之と見へたり（貴殿とは伊勢伊勢守貞親を云ふなり親元は貞親の被官人なりし故に貞親を貴殿と云ひたるなり）此外内記處々に公方の御臺處を上様と記したり。（秋草人品稱呼の部）

○江戸よいたりて尋ぬればふるき友ののこるは那し

小野寺十内秀和

枕かるゆかりの草もかれはてゝしもにおきそふむさしのゝ原。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百廿八號　明治二十一年九月廿二日發兌

社説

○理想の紳士

(第四)、正當の紳士。　ゆかり記

然らば、妾等が理想とする紳士は如何樣の人なりやと、申すゝ、固より別段の儀も無之、たゞ正當なる意味に於ての紳士之を一言すれば、眞とに男らしき男の御方ぞ、即わち眞正の紳士ならんと存じ侍べる。

扨て、男らしき男とは如何なるものにや、之れ甚はだ解き明し惡く、云く言ひがたしと申すの外なきことなれども、左りとては論もなし、茲に先づ其の大躰を叙ぶれば」。何よりも先きに、其身躰强壯にして、氣骨凛烈になうては適わず、夫故彼の肺病やみの如く癆瘵症の如き古しの色男ならざるのみか、自己防禦の爲に武術一と通りの嗜なみを心得、若し徴兵せられて運よく籤に當れば、奮つて國軍隊の仲間に入を樂しみ、毛頭も徴兵逃れの仕度する如き臆病未練の卑怯なきのみか、既でに其の驗査に會ひては、骨格完美あつぱれ逞ましき男となりとして賞らるゝ程の人にてありたし。次に、其氣象を言へば、膽力非凡にして、剛毅質直なれども、亦た能く寛大温良にして、文武の兩德を兼ね、所云る威ありて猛からざるの趣きありたく、亦た、慷慨悲壯にして、衆に先だちて怒り、衆に先だちて憤立するの勇はあり乍ら、恰かも彼の激浪の下に千頃の靜波存する如く、用意愼密にして、能く沈思熟慮し、即はち出でゝは將となり、入ては相となり、戰亂には千軍萬馬を引卒する創業の英雄となりて、治世には百官庶民を馴撫する守成の大政事家たるの伎倆ありたし。平生、之に接すれば、沈默寡言、朴訥にして口に言がたきの樣姿はあれども、一とたび止なくして欝勃の辨を發すれば、風起り雷鳴り、議論必らず鐵壁を貫らぬくの力あるようにてありたく、亦た、其風采は、深沈自重、敢て輕々しく動ざるの躰はあれども、一とたび機に會すれば果斷決行、志の到る所ろ金石をも透し、而して忍耐敢爲毫末も屈せずとの覺悟あるようにてありたし。其の道德を見れば、潔白淸廉にして守る所ろ强固なり、貧賤に在ては貧賤に甘んじ、困厄に會ひては困厄に樂しみ、重任を負ふては重任に安んじ、一朝義に勇みては死すとも顧みず、終年の務めは只正を蹈んで懼れずと申す、所云る聖人にして義士を兼ね、君子にして英雄を兼ぬるの人物にてあり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たし。故に、其の靈は強くして堅く、其の智は周くして密に、其の心は温かにして切なるべし、言を換れば、其の志望は遠大にして、目前の事に齷齪せず、度量廣くして、小事に頓着せず、氣分大きやかにして、些細に心配せず、自任高大にして、小成に滿足せず、即わち、こせ〳〵とせず、くよ〳〵とせず、生意氣あらず、ゆツたりとして而して活潑よ、愚なるが如くして而して八面玲瓏の智を存し、温良恭謙にして而して強剛勇壯にてありたし。以上は先づ妾が理想とする一人の紳士を寫したるものに侍べり、此外に尙ほ男らしき男に存するの美徳多くあらんとは存じ候へども、大方は右の數條を推して他の眞質を判じ得べくと信じ候。夫れ故妾は、世のたわれたる姉妹等が迷ひに由て、彼の譯もなき詰らぬ似而非紳士を出すことを、恰かも蛇蝎見るように惡み侍り、斯る姉妹等の理想には、大の反對を表するものにて候。而して妾が同意見の方々には、殘念なれども西洋の女性に多し、先づ彼のマダム、デ、スタルが、自著の理想小說「デルフヒン」と云へるの卷首に題して、

女は、何如に其說に從ふべきかを知らねばならず。男子は、何如に其說に反對すべきかを知らねば成らず、

と申されたる如く、男の意氣地もなく、只ハイ〳〵と曲從するは好ましからず、何卒正面より反對し、正當の手段に依て反對し、而して明白に其議論の是非を辨明するようなるが万事に願わしく候。亦た、彼のミス、ミウロツクが、自著の理想小說「ジヨン、ハリフハツクス、ゼントルメン」と云へるの初めの方に記るして、

凡そ優し(テンダチツス)と云へる情は、深切、愛敬、好意なんどに異なり、強き、深き、緘默なる人に於ての外かに、見出し得ず。左れば、眞の優しき情なるものは、多くは女性に存せずして、強き男子に於て初めて之を見る、

と申されたる如く、男の女らしく深切あるは決して慕ふべきにあらず、頑强なると巖ほの如くして、而して其下に[illegible]り優溫なる少との優しき情を瞥見いたしてこそ、眞と、大丈夫相當の深切と申さるるべけれ。夫故前にも說いたる如く、何卒根なき男の深切に迷はざるよう、何をも擱いて只だ深切を第一の美質のやうに思はるゝことのないよう、切に忠告申上ぐ。扨又、男子が其地位を重んじ、獨立獨行して着々立身出世の雲梯を登り行くは、即わち丁度彼のハリフハツクスの如くにてありたく、又た、ゼヲヂエリヲツト女史が、其の「アダムビー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ド」、及び「ヘリクスフホルト」に於て書現はしたる紳士の如くありたし。次に、其の女性に對するの處置は、彼のブローニン夫人か「アウロラ、レイ」の理想長詩に書かれたる如く、何卒、妻を己れの書記に仕度い、己れの介添に仕度いと云へるようの心なうして、全く、純然たる友人、純然たる同等者として持なすとの男子にてありたく。尙又、ウィルラルド孃が、其の受愛何如の書中「理想男子」の一篇に書かれたる如く、何卒、當世の勳爵士となりて、女性を優待し、女權保護、女權擴張の爲めに盡力する、正さに深切の男子にてありたし」。妾は即わち、此類の西洋女學士に同じ、斯る心得を存したる男子を以て、正當なる理想の紳士といたし侍る。

左れば、斯る紳士にして若し政治社會に立たば、剛直、公平、果斷、明決、敢爲、自重にして、固より藩閥を守張せらるゝの弊もなく、固より賄賂を甘納せらるゝの氣遣もなく。長上に佞ねるの卑屈心なければ、下に驕り高ぶるの慢心もなく、夙夜に思ふ所ろは斯の民なり、斯の民の爲めに忠貞勤勉にして、利は一利にても多かれ、害は一害にても存するなかれと憂苦し、只管らに、人民を愛し、自由を愛し、眞理を愛して、以て其の民の代理者たる重責任を盡さんとはせらるゝあらん。

又若し斯る紳士にして事業社會に立たば、着實、堅固、愼密、勉勵にして、豫算は明確に、生計は儉約し、固より權門に媚びるの掛念なければ、亦細民を欺かんとの不都合もなく、獨立獨行して、自ら利し、自ら衣食し、敢て毫末も他を侵さず、而も能く自利を圖つて且つ公益に注意し、多く集めて廣く散じ、專ら國家の產業の伸張せんヿを目的として、終始一國の富の大に增加せんヿを本願とはせらるゝならん。又若し斯る紳士にして學者社會に立たば、深く窮め、細かに考へ、超然として凡俗の上に脫出し、任ずる所ろ高尙遠大にして、敢て時勢に屈せず、眞理を幽幻の境に發見して、之を四民公共の大利に實用せしめ、萬民狂の如く惑ふの日、獨り冷々として其の方向を指ざし、即わち遠きに憂へて、且つ目前に監み、博く愛して、尙ほ個々の民に慮ばかり、自から造化神の天使と爲つて、四海の大舟の趣むく所ろを導くの覺悟あらせらるゝならん」。斯てこそ眞に、政治社會の紳士、事業社會の紳士、學者社會の紳士と申され得べく、彼の今時の出來紳士に比べては、雲泥万里莫大の相違と存じ侍る。

何如に、日本國に居ます二千餘万同胞姉妹の方々よ、若しも玆に申すが眞理にて候わば、何卒向后、斯くの通りに理想し、

お互ひの理想によつて立派なる君子を出現せしめ、此の東洋に眞正の紳士國を打立てたく候ハずや。ダル井ンと云へる學者は、彼のきり〴〵すの狹席に鳴く、蟬の木梢に鳴く、鶯の春來れりとして鳴く、鹿の尾上に紅葉ふみ分けて鳴く、其聲何れも美にして詩人歌人の膓を斷てども、元と是れ雄が雌を迷わし、牝が牡に媚びるなりと論じたり、左れば其聲雄牝にあつて、雌牡にあし、亦彼の鷲鳶の羽に美なる、猿猴の奇しき毛に富んだる、終に男子に鬚髯あつて、女性に之れあきに至るまで、皆是れ、女を迷ハさん、女に愛せられん、との元因によりて出で來れりとは申す」。左れば、明治二十一年の妾等が理想は、必らずしも、目前に於て相撲を取り相撲に勝たれたる男子を以て偉丈夫とするにもあらず、必らずしも、四肢全躰に繪の具を塗り繪の具の美しく塗られたる男子を以て美男子とするにもあらず、必らずしも、劒道に達したり射藝に堪能なり鬚髯美なり風骨勇ましゝと云ふのみを以て魁男子とせるにもあらず。實は前申す如き條々を以て妾等が理想といたす、此の理想にして若し日本全國の女性に汎からば、男子も恐くは其如く鳴き、其如く飾り、其如く相撲を取て、遂に妾等が理想する所ろの美紳士、忽焉として出現せらるゝに至らん。何如に姉妹等、さようつとめ參らせうには候ハかぬ。女學子評。御尤もと贊成いたす、之を尤もと爲玉ハぬ人々、及び更らに其の理想を補ひたしと覺召す女性の方々あらば、遠慮あら吾人に書送られたく存じ候。

論　說

○妻君の資格（其四）　紅雨亭　一　枝演舌

母の愛ハ吾人社會の明なる前知者にして世界の幸福禍害文明野蠻の別ハ一家婦女の勢力に關すると少なからず凡そ母ハ他の敎師よりも善く人情的に敎育するものにして吾人ハ婦女に依て德義に達するの能力を得るものなり故に善良なる母は常に一家中に德義の空氣を製し之を以て精神に富める人才の滋養物と爲すとを知れり。

極めて貧寠の家と雖とも德高く愛深ふして勉强なる婦女あれは是即ち德義快樂幸福の鄉里なり此の如き婦女は常に男子の心をして神聖ならしめ男子若し行路颶風の難に遇ふときハ其の爲に避隱所を設け男子勉强刻苦の後には之か爲に其休息所を作り不幸の中に彼を慰め幸福の中に彼を勵まし終始男子の喜悅を爲す者は婦女に非ざるなし。

英國の諺に曰く男子の家は其堅城ありと然れども勉強節儉秩序平和正理公道の支配する所の家は是亦た一の堅城なり此の如き家に在つては男子は益々其德義を增進するを得て意思安靜に志想活潑に識見廣博にして十分なる勇氣を以て其家を出て紛亂せる世界關係の中に侵入し眞理と權利との爲に戰ふて大勝利を得るや必せり。

幸福なる配偶は人心を形つくるに最も適當なる法にして此處に在つて幸福あるものは亦た皆同時に改良するを得るなり道德此處に於て活力と愉快とを得、仁慈溫柔耐忍此處に於て美麗なる果實を結び威力は總て破られ疎暴は總て制せらる共同一致の心此處に在つて益々其力を得て人民生活上到る處直に其改良を促し愛情此處に在つて愈々眞となり美となり善となるものとす。

世界に於て愛情が心と附着するの間は道德倘ほ其祠堂を保つを得可く配偶倘ほ神聖なりと見認らるゝの間は時勢の敗德未だ全勝を得ると能はざるなり配偶爲に道德の大利益を得る其れ此の如し道德を論ずるに當りて何ぞ之を默々に附す可けんや。

幸福なる配偶は國家の最も倘ぶ可きものにして社會の守護神なり故に國家若し多くの幸福なる配偶を有する時は國家は未だ亡ぶる能はず社會倘ほ幸福なる眷族の注意に放任さるゝ時は社會は亦た未だ滅すると能はず高倘なる種族は幸福なる眷族の膝下より輩出するものにして人は已に其膝下に在つて他人の爲に生活し其身を犧牲にするの習慣を成すなり心此處に在つて溫和優柔の德を養ひ汚穢なる利己心が未た其根底を成さゞるの時に當りて總て人性の高倘なる感情と附着し精神亦た此處に在つて未だ社會害惡の汚す所とならざるに先つて人間の價値と其幸福とに向つて發動するものなり。

是を以て時勢の改良は盛に幸福なる眷族の繁殖を謀るに依て獨り其希望を達するを得可し。

以上は「ウィッス」氏の說なるが婦女の一家中に於ける勢力此の如く大なり一家の國家社會に及ぼす影況此の如く甚し誰か一家の務を以て小なりと謂ふか而して一家内の事たる獨り女子緻密の眼、熱情の心の能く爲し得る所にして男子の家政を修むるに拙なきは猶女子の敵軍を防禦する能はざるが如し故に眞の文明の空氣を呼吸し眞の婦女たらんとする者は必す空中樓閣を畫くが如き妄想を去つて良妻賢母たるとを務めざる

可からず予の後來苦樂を共にせんとするは此の如き婦人に外ならず而して是實に我新青年諸君の希望する所の細君ならんと信ず否有爲の青年たる者は此の如き婦人に非らずんば決して共に事を成すヿ能はざるなり然れども余は貴孃諸君に向つて無學無藝獨り男子に依て衣食し釋迦をして三界に家なしと謂はしむるを欲するに非らず深窓の中に閑居して社會の日光を見ず其面の菜色なるヿを欲するに非らず固より婦女と雖ども危難に遭遇して獨立の生活を爲すに足るの學識技藝は之を有せざる可からず且つ良妻賢母たる無學無藝にして能く之を爲さんや故に余は「ミス、ナイチンゲル」の善行は勿論機に臨んでは「オルレアン」少女の活劇も爲し得可くんば爲されんヿを奬む彼の唯々諾々打つも怒らず謗るも怒らず無氣無力にして常に男子の意を失はんヿを恐れ御無理御尤唯だ命是從ふ藝娼妓輩の御親切れ眞平御免を蒙らざるを得ず兎も角も余は只だ婦女の男子に變生せずして女子に止まらんヿを希望す諸君幸に誤解するヿ勿れ余が後來の細君に望む所の最も必要なる注文は大凡此の如し。

然れども諸君知らずや世途の至嶮なるは重疊せる列嶂を越ゆるか如く世海の至難なるは暴惡なる茫洋を航するに似たり朝月明ならんとすれば痴雲之を蔽ひ濃花漸く開て狂雨之を落す儘にならぬは浮世の常なり況んや棒程願ふて針程叶ふに於てをや然は則ち余の希望此の如しと雖ども余は必ず此希望を達するを斷言するヿ能はず且世に似た者夫婦と云へるヿあれば余若し今日の「ヒヨツトコ」に止まらん余の細君たる亦た色も香もなき於多福なるヿ當然なり故に余は假令ひ面上の「ヒヨツトコ」を消抹し去る能はざるも心中の「ヒヨツトコ」を改良して濃花朗月をして吾伴たらしむるヿを務めざらんや余豈痴漢常鞭駿馬走好妻多伴情夫眠の笑を免るゝヿを謀らざらんや余は今希臘のフィロソーハ、「アリストテレス」の談を以て此演説を畢らんとす曾て一の多辯家あり「アリストテレス」の面前に於て滔々懸河の辯を奮ひ談畢て「アリストテレス」に謂て曰く不肖の辯實聽を煩はすヿなからんや請ふ之を恕せよ「アリストテレス」曰く否々決して左樣の御心配は御無用何となれば余は少しも注意して君の談を聽かざればなり余の辯固より彼の多辯家の比に非らずと雖ども余の言にして若し諸君の清耳を汚すヿあらば何の幸か之に如かん余の無味無臭の談諸君の聽神經を刺激するに足らずして彼多辯家と同一の運命に遭遇せんヿを恐るゝなり。（完）

○婦人の文章

中島俊子

或人小說を論じて曰く書中の人物彼が如く談話彼が如く發端彼が如く結局彼が如く照應彼が如く句調彼が如く搆思彼が如く何ぞ以て小說と爲す可けんやと余は如何なるものを以て眞の小說と確定す可きやを知らざるのみならず却て一定の法則なからんことを望むものなり字に珠片玉屑を聯ぬるも意氣太だ然らざるものあり搆思偏に緻密にして筆痕太だ粗雜なるものあり優趣愛すべくも字句力なきの感あるものあり筆力餘りあるも情味欠くるの思ひあるものあり著者瞋て讀者瞋らず著者笑て讀者笑はず著者の號泣は著者獨號泣するのみ著者の歡喜は著者獨歡喜するのみにして未だ讀者の感情を動かす能はざるものゝ如きは素より至り盡せりと言ふを得ざるものなり然れども紙中善人のみにして一の惡人なきを以て小說ならずと言ふ可からず悲愁の境遇のみにして歡樂の鄕なしと云ふを以て小說ならず貴女紳士の關係のみにして一馬丁一車夫も出でずと云ふを以て小說ならずと云ふ可からず若し小說に一定の例規ありとせば終世馬琴の著にして足るべきに左あらずして人々新著を讀まんことを欲するものは其意匠の異なると字句の新なるとに因るなる可し若し之をして同一轍ならしめば新に著さゝるの勝れるに若かざるなり故に皆各其意のある處を筆して可なり亦他人の以て小說ならずと言ふも何の妨げか之あらん素より小說なると小說ならざるとに關するを要せざればなり。

只今日文運旺盛の時機に際し昔時一丁字をも解せずと侮蔑せられし婦人も鋒を文壇に向ふに至れり千の紫式部百の淸少納言を生ぜんとするの空氣を釀すのみならず已に今式部今納言を見るの幸を得たり此幸を得ると同時に聊か考ふる處あり固より男子の著と女子の著と區別するの必要を見ざるなり然れども今日續々世に出る所謂小說種類なるものゝ中自ら好むと好まざるとにあると雖も一小冊の中二三ヶ所乃至五六ヶ所は他人の氣附かざるに氣附き他人の言ふ能はざるに言ふなど實に贊歎に勝へざるものなり著者が勞實に想ふべし一書出る每に新を織り奇を網まんことを願ふなるべし隨て世態人情餘す處なく紳士貴女の境遇より湯屋の三助が言葉迄偏く知らんことを欲す之を知れば勢本職の三助よりも猶一層烈しき言語を綴り出すに至れり是必竟讀者の感じ薄きと博識の譽を得る能はざるとを恐るゝに因るなるべし然れども餘り博識に過ぎて紙中稍塵埃を帶ぶるの感じなきにあらずや殊に婦人の著には藝妓雲助等の擧動言語を明らさまに描き出すは甚だ妙ならざる如

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く覺へり勿論時として此の如き著の稀れに世に出るも可ならん左れど小説種類なるものが悉く同一徹を踏むは甚だ好ましからぬ如く考ふなり。今や婦人の著者羣を趁ふて出んとするに當り念頭偏に讀者の感じ薄きを恐れ却て巧みに失して優趣雅潔の筆を汚すなからんとを望む。

批評

○洋服案の討議　みどり

渡邊鼎君の寄贈に係る、「洋服採用の可否何如日本婦人諸君に告ぐ」と云へる一篇は、女學雜誌第百二十號より第百廿三號迄でに分載されたり。女の服裝お化粧等に用心深き「いらつめ」雜誌は、其第十五號に於て嚴しく之を駁撃し、渡邊氏の論決十ヶ條に對して、皆ろれ〳〵に小言を述べらる。余は女學記者と意見を同うし、隨つて多少渡邊氏と考を異にする所ろあれども、「いらつめ」記者の卓説に感服する能はざるは勿論なり。定めて渡邊氏の答辨もあらんとは存ずれども、此の友遠方に在つて、容易に言を寄せがたし、因つて兎に角愚考する所ろを附記して、此の討議を一評すと云ふ。

(渡)は渡邊氏が女學雜誌に於て論ぜられたる論決、(い)はいらつめ記者が右を摘出して扨て答へられたる辨難。

第一　(渡)日本婦人服は前部開放せるか故に步行するときには脛部迄現はれ風の吹くときは實に見苦るしき有樣にして手を以て之を支ゆるに非ざれば安心して步行すると能へず……

(い)いらつめ第十四號に載する處の新案ある所以なり。

評。實際に御新案を試みて御覽じろ、衣物が自然と破れます。

第二　(渡)長袖は兩手の働に不便なるのみならず腋下まで開け放ちてあるが故に戸外に出て强風に遇ふときは腋下胷部の柔軟なる皮膚へ直接に寒風の侵襲する危險あり。

(い)西洋女正服の肩を露はし腕を露はすに孰與れ。

評。西洋の女正服は働く時に用ゆるに非ず。又た肩を露はし腕を露すの正服は彼地にも反對論多し、日本では無論此の風を採用すまじき筈です。然し乍ら日本服を風の這入らぬようには如何します。

第三　(渡)日本婦人服は上下一連續に出來てあり衣服總躰の重みは皆一點の肩に持たするが故に呼吸の運動を妨げ又は頭痛腦充血等の誘因となると少からず。

(い)コルセットの呼吸、消化、循環の諸機能を一時に妨ぐるものに孰與れ。

評。何如なる日本服も上下一連續なり。コルセットは必らず用ゆべきものに非ず。

第四　(渡)帶を大層に腹に卷き着け眞に見惡しきのみか無益のとなり察する處是は品物は澤山ありても智慧の足らない野蠻時代に用ゐ始めたる遺物ならんか恐らくは世界に無類の愚品といふべきなり。

(い)見惡しひ無益なりといふ點よりいはゞ西洋女服の腰の飾は日本女服の帶に過ぐると萬々なり天下の愚物何物か之に過ぎん。

評。此所双方ともに見惡しからず、必しも無益に非ず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

但しいらつめ記者の云ふ西洋女服の腰の物とは、宮廷の女服もしくは大禮服の曳尾を云ふにあらぬか。夫は決して日本の帶に比較して申す可きにあらず。

○○第五　(渡)或人は和服に靴を穿つを貶しとすれども和服の如く裙の纏ふ衣服に靴を穿ちては裾は直ちに汚れるのみか忽ち破れて頗る不經濟ならん。

(い)余輩は日本服を着て西洋靴を穿つことを望まざるなり。

評。日本の下駄が文明時代に久しく行わるべきか、愚極まる。

○○第六　(渡)和服は上下に通じて開けるが故に步行する際には衣服の裏面飜轉して露るゝを以て下着の裏面に至る迄上着同樣の上等品を用ゐざるを得ざるが故に不經濟なり。

(い)目に見はぬ處にも金を懸け目先ばかりを衒はぬは日本人の特有する奧床しき性質なり夫の鏡の裏面に精密なる模樣を鑄出し下着に上等の品を用うるが如き其一班なり此をしも不經濟として咎むれば夫迄のことなり西洋女服の表ばかりギラギラと飾り立て裏面は紙に同樣なる如きは日本人の見込なしとして甚擯斥する處なり。

評。此の答辨は神田の兄哥の論法による。

○○第七　(渡)和服は上下一連續にして且つ身の丈より少しく長き故に腰の周圍にて皺を作る等の不便あり。

○○第八　(渡)和服は洋服の如く自分の氣に適ひたる樣に形を拵へ置かざるが故に外出する度每に帶の結び格好を拵へざるを得ず車に乘るときは帶の形を損せざる樣とて背をくの字形にして坐するの究屈あり。

(い)　七八にいふ處は和服の不便なる點に相違なし然れども之を以て洋服の腰の飾に比すれば孰れか伯仲なるを知らず。

評。和服は自分の氣に適ひたる樣に形ちを拵へ置かざるの不利ありとは新しき考なり之へのお答なし。

○○第九　(渡)和服は總躰開け放ちたる裁躰にして殆ど防寒の用を失するか故に自然數枚の衣服を重ねざるを得ざるのみか殊に裾の方に澤山綿を入て重みを加へ裾の開放を妨くと不便極まる。

(い)和服の數枚を襲ぬるは躰裁の罪にあらずして材料の爲なりもし和服を裁するに毛織物を用うるに至らは洋服と異なることなからん。

評。毛織物を用ひたればとて、和服は矢張り開け放ちたる躰裁なり。

○○第十　(渡)日本婦人女服裝は總躰體の中部に於て張り出し足の方に至り陰ませる故身躰低く見ね且足の步狀も現に見ね何となく下品にして見惡るしきも洋裝は躰の下部に至るに從て擴張するが故に身躰も高く見ね且足の步狀も現に見ねず如何にも優雅に泰然たる風ありて美術上自然的に婦人に適當したる服裝といふべし。

(い)渡邊氏は此一ヶ條丈和洋の比較を取られたり美術上よりいへば和洋優劣を以て判ずべきにあらず西洋女服のコルセットに腹を縮めペチコートに裾を張るは美術上の好尙に迫られたるが故なり近來益裾を曳くと甚しく隨て腹を縮むると益甚しく躰を少しく前に屈むるにあらざれば後に倒るゝの恐あるに至れり和服にても袖を長くするに隨てフキを多くし帶の結目大なれば腰の下を細くするは自然美術に適したるなり之を下品なり見惡しといふは百步を以て五十步を笑ふといふべきのみ。

評。渡邊氏は其由來を述ぶるに非ず。足下の狹まりたるは、擴がりたるの美術に適るに若かずと論ぜらるゝ迄なり。

近來益々裾を曳くと甚しとは、何國の事なりや。

要するに、束髮の如き、洋服の如きが后來の日本に行われんとは、何如に高島氏の門弟にてなくとも、甚はだ明白に占はれ得るとあり。但だし余は、其の最初貴族的の需要によつて行われず、專はら平民的の入口より行われ來らんとを願ふもの也。

○ラッペエブラルド氏、女子の敎育

曩に大日本敎育會に於て演舌せられたる佛國學士ラッペ、エブラルド氏の演說は、羅馬字雜誌第三十八九四十の三號に掲

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

載せられ、此頃に至り漸く其全篇を覽了りたるに付、玆に其大躰の主旨を申せば、

男女同權論女子教育論は、佛國革命の后に初めて起り、且つ今を距る五十年前頃よりして大に喧しく成りたり。然し其以前には、男は全く女を奴隷の如くしたり、女の教育には毫も頓着せざりしと云ふは誤まりにて、之は只だ小說家の申したること也。成程耶蘇教行われて後ち、初めて女の地位高くなりたることは事實なれども、彼の佛國革命前迄、左樣に女を殘酷にしたりと云ふは大業の言なり。八百年前、佛國に於ては女の小學校あり、其教員は女教師なりき、其後ルイ十四世の時に至ては、女子教育特に行われて、フエチロンと云へる學者が、其著書「女子教育に付ての意見」に明記したるほどの事あり」。日本に於ても、男女同權論は明治五六年よ於て初めて輸入せられ、此頃に至て女子教育の議論頗かに盛んところ成たれ、其昔しに於て毫も頓着せられざりしと云ふには非ず、既に、女誡、女今川、女大學、女小學等ありて、隨分に嚴しく教育せられたること也。

然るに此頃世人の言葉に、昔の女は無學であつたと仰せある、成程昔しの日本婦人は、今の女生徒の樣に多く書物を讀まれざりしことは確かなれども、其仕附方に至つては、反つて今の女に優つて居りました。今では左程日用に成らぬ、身分不相應の學問をして、而して直接入用の學科に頓着せぬ弊が見へまするが、昔しの日本女子には斯ることは無つたのである。夫故へ、今の女が昔しの女に及ばぬと迄では斷言せられざれども、然し昔しの女が今の女よりも無學であつたと云ふは、確かに心得違の論でありませう。昔し、英國王ゼームス一世の前に於て、或人が重立つたる人の娘を賞めるに、あの女は、希臘語羅甸語その外歐羅巴各國の語にも通じ、又文章も音樂も能く出來ます、と云つて居ました所ろ、王が、女で斯樣に種々な科目を覺へるは實に感心すべきことである、然し針仕事を知つて居る乎、と問われましたが、生憎之を知らなかつたとの由で、王の申されまするには、女が箇樣なる仕事をも知らなければ、之を賞めることは出來ぬ、となり。

世に男女同權論を主張し、又た男女同樣の教育を施すべきことを論辨するものあれども、之は大なる間違なり、男と女とは、其仕事も違ひ、其腦力も違ひ、其の躰力も違ひ居るゆへ、其の教育も亦必らず違はねば成らぬ。女子の教育は

何故に男の教育と異ならねば成らぬかと云ふ問の答へに、女は何故に男と相違して居るかと云ふ問を出せば宜しひ、故に余は、アプトーの小説に倣らひて言ふべし、女子を教育するものは、支那人が其の足をいぢめる如くに、其の腦髓をいぢめては成らぬ。

此外尙あれども、女子師範校女子中學校等に女教員の入用を說かるゝ事（其女教員には尤も高等の教育なくては適うまじと推察す）、音樂は左程入用ならず、女子職業學校及び高等女學校の結搆なる事等にて、何れも少々矛盾の論と思ふに付き略す。但し、右に抜摘したる丈けは、眞に名論と云ふべし、實に贊成の極に堪へず。但だ此類の議論を爲さるゝ人々に、此際二三の注意を呈すべき事あり、即ち

一家を修むるとは、割烹裁縫育兒等にのみ限らず、良人を助くるの大役も含み居る事、而して學者偉人の夫を助くるには、固より亦相應の學力あくては適はざる事。

身分相應の教育とは、貧乏人には卑き教育にて宜しとの義にあらず、后來に安んぜんとする身分に相應の事と覺悟すべし。故に、尤も正當なる身分相應の教育を施さんとには、官邊の保護金などに因て漸く成立つ女學校を設けざるに在る事。

吾人が裁縫音樂等を主張するは、裁縫音樂其物の効能あるのみに由らず、此等の教育は能く女子の女性を發育するの効能あるに由る事。

叢話

○クレブランド夫人は流行の母乎

右樣の問題、此頃のニウヨークヲールド新聞に現われたり。凡そ流行と云ふ風は、一種奇躰の山穴より起るものにて、エリサベス女王の頭あが細長く、之を隱す爲めに巾を被ひたるものが、一種の帽とあり、郭林宗の冠の角が折れたより、切角の冠が流行たるように、譯もあきとより新風俗を生じて、其風は己が儘に吹き行くもの也。此頃、英國上流社會の流行は、過半、皇太子及び皇太妃の御殿より吹出るよしにて、既に皇太妃が少々ビッコに居まして足を御引ずり遊ばし、尙ほ之を支へん爲に瑣細の杖を携へらるゝが、之よりして壯健ある人もわざ〳〵片足を長く見せ（即ち片足を短くす）若い乍らに杖を曳くよし。斯樣に英國に於ては、風俗上より天降る、米國に於ては果もてクレブランド夫人が新流行の母となる乎、と是れ

即ち新聞紙面の一議論となりたると也。然るに、同夫人の評判は當時滅相の頂點に達し、之が爲めに大統領の再撰擧を希ふものある程なれども、「妾等米國婦人は、敢て英國上流のレデーに似ず、何如に夫人を敬愛すると云へども、決して其樣姿を眞似んとするものにあらず」、とは先づ〳〵紙上に於て公平に論決さるゝ所となりたり。

〇女學校に於ける、聖書佛經の暗誦

東京婦人矯風雜誌第六號に、左の問あり

吾同盟なる女學雜誌記者ハ其第百十九號新報欄內に女學校と宗教といへる問題にて女學校に於て女生徒に聖書の諳誦を爲さしむるハ害あつて益なしと論ぜられたり之れをして餘人の口より出しめハ默して止んされど同記者の云ふ所とすれハ決して緘默に附し去る克ハざるものあり尤他日其理由を論ずとあれハ定めし逐次辨明せらるゝ所あるべしと待居しに已に百二十餘號に至るも杳として其事なし記者ハ宗教道德と人間の倫理とハ別ものなりとの見解にて如此ものせられたるにや全國に基督教主義の學校枚擧に遑まあらず皆讃美祈禱を以て始め諳誦をなし又讃美祈禱を以て終る之れ同主義學校通例の正則なり老婦も亦開塾の始めより今日迄熱心に之れをなす者なり知らず何等の害あるにやよしや何樣の理屈あるにもせよ老婦ハ人氣の如何に因つて一時の便宜を謀るが爲めに有益なりと認むる正則を廢するハ誓つて贊成する能わざる所なり知らず何等の害あるにや謹で明教を請ふ

長榮女塾長

淺井作白

細密の事は、他日「女學及び宗敎」を論ずるの日に申すべし。淺井女史の高問に對し、今ま簡短に前言の理由を解すれば、凡そ女學校に於て宗敎の書を讀ましめ又其道德を敎喩するは宜し、然し其の聖書もしくは佛經を諳誦せしむるは不可なりと云ふ事、一は德敎實効の上より論じ、一は敎育方の上より論じたると也。そも〳〵女宣敎師もしくは尼となる者に非ずんば、決して聖書佛經の章句を諳らんずるの必要なく、又宗敎道德を實際に敎喩せんと欲して、其經を諳誦せしむるは得策にあらず。吾人は宗敎道德の精神の行れんことを切望す、其死文字の鸚鵡的に諳誦せらるゝを好まず、況んや女學校は多忙の地なり、斯る無必要の科業に時を費さしむるの余暇あるべくも候わぬものぞ。

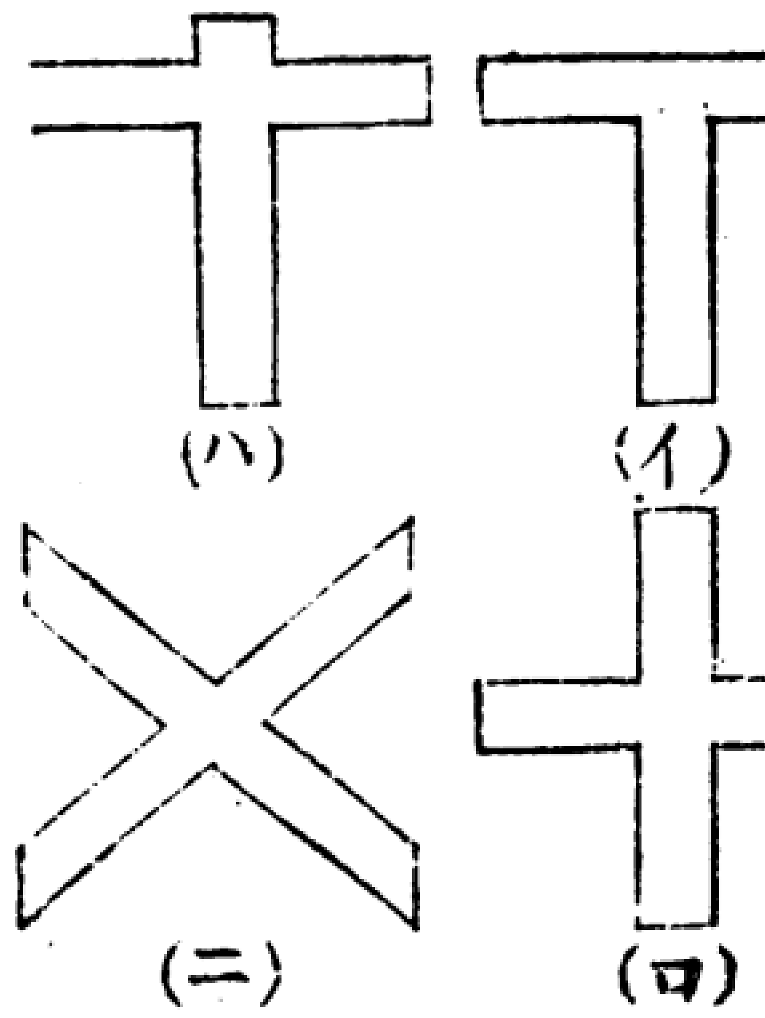
〇泰西美術小話（其一）　山田美妙齋

御勸めにまたがッて是から簡畧に泰西美術を解すべき御案內を申しましやう。既に御承知でも厶いましやう、全躰宗敎と美術との關係はそのむかし非常に親密でありました。現に日本で例を出せば金岡以下有名の畫工は一ッとして宗敎畫に大作を作らなかッたものは有りません。觀音の像、天女の圖、いづれも想像を廣くめぐらして、無いものに力を見せ、空なものに勢を示さうと勉めたところから遂にこの宗敎が源因となッて非常に美術の進歩を來したも當然な譯です。是は日本のみで厶いません、西洋もまた左樣です。埃及の壁に殘ッて居往古

の筆痕でも希臘の土から堀出す古代の鑿の痕でもいづれもその發達の妻又は宗敎を持ッて居ました。否、むしろ宗敎が夫で美術がその妻でした。　後に羅馬の末となつて耶蘇敎がはじめてあらはれた以來は益々美術は羽翼を添へて、東西相殊なッて居るにもしろ、遂に今日のとほり盛になりました。

ですから美術に宗敎くさくないのは殆んど少なうムいます（殊に古代の美術に）。　そして古代は今日のやうに贊だの題辭だのといふ面倒な事をば爲ず、また其上に想像は自由に回つて居ますから、自然符號めいた畫をこしらへて妙にすまして居たのも無理はありません。　古代どころではありません、謎めいた目標を置くのは物事が繁雜にならぬ世の常で、既に近頃でも片僻へ行けば、日本でも杉を逆につるし（サカバヤシ）と判斷させる類もあります。　是です、古代の美術に色々なお符號のありましたのは。その符號とは何です？　近く例せば日本の古書にもあります。　御覽なさい、うるはしい少年の文珠菩薩は。獅子に騎ッて居ましやう。また御覽なさい、うつくしい普賢菩薩は。象に跨つて居ましやう。　或は火焰を負ふ威怒王、或は合掌して居る勢至菩薩。この獅子、この象、この火焰、この合掌。それらが皆符號です、俗に解けば商標です。　たとひ式紙樣の詞書は無くとも冠傍下馱印の贊は無くとも、この獅子が居るので文珠といふ事が知れ、この象が居るので普賢といふことが知れ、また火焰や合掌でそれが威怒王であつたり、また勢至であつたりするといふ事が知れます。　西洋の古代美術、重に言へば、宗敎美術もまつたくこの日本のと同じで、さて其符號を覺えてこれは何、これは何と見分けるのが隨分勞力のかゝる事です。　その符號を一ッ二ッ述べましせう。

第一は西洋美術を見た人は誰でも知つて居る十字架で、是が符號の中の極めて重なものです。　此頃になッてこの十字架の形について用方が些し無茶苦茶になりましたが、實は左の四種類の十字架に各違ッた意味があります。


（イ）（ロ）（ハ）（ニ）

このイは埃及十字架（Egeptian Cross）とも言ひ、あるひはシント、アンソニイ十字架(St. Anthony Cross)とも言ひます（アンソニイといふ人は埃及の人です）。また時としては之を舊約書の符號とします。

次に(ロ)は希臘十字架と言ひます。　是には色々な變躰があります。

次に(ハ)は羅馬十字架と言ッた、すなはち基督が掛けられた柱をそのまゝに現はします。

次に(ニ)はシント、アンドリウ十字架と言てサイモン、ピーターの兄弟アンドリウの符號で、此十字架を小脇にかゝへて僧衣を着け、右の手に經典を持て居るのは皆この人の像です。十字架でさへ重立ッた處は是ほどで、なほ色々な變躰が澤山あります、　十字架の話を終るに臨み、一寸面白いことを申しましやう。基督が受けた五個の創痍を示すために十字架を金か銀で作り、其中へ一ッ及び四隅へ一ヶ處づゝ併せて五個の紅玉石を嵌めてその痍に象ることがよくあります。　符號の性質は是で大抵御わかりでしやう。

第二、洋燈(或は蠟燭)。　と言へば老爺の禿頭かと思ふ人もありましやう。　が、中々それどころではありません。通例これは熱心の信心の符號で、また St Lucia (シラキユースに居た信女)の像の處にあれば貴い智慧といふ意味になります(この外にルシアの符號には懐劍があります)。

第三、　龍　　これが日本や支那の考とまるで別です。勿論形もすこし違ッて日本や支那のほど神聖な形ではありませんが、罪惡、邪教、洪水、飢饉などの符號で現に St Margaret(タスカニーで生れた信女)の畫などにはマアガレットが羅馬十字架の鎗を持ち、その石突で龍の口を突いて居る躰となッて居ます。　龍の形などは Dante Divine Comedy の挿畫などによく出て居ます。

第四、蛇　　これは東西おなじ趣で、やはり罪惡執念などの符號です。　之が世界へ卷付いたやうに書いてある繪がありますが、これは世界に罪惡の人が多いといふ符號です。

第五、橄欖　　これはいつでも平和の符號で殊に Archangel Gabriel (有名な聖使ー天宮星宿の環を被り、天羽の生へた姿の人)に多く用ゐられます。非常にたふとい符號です。

小説

○哲女の卷

第四回　幻(上)

月の舍しのぶ

夜は更たり、夏雲半ば散じて月明らかに、虫音草村に鳴つて初秋に似たり。内に入つて之を見れば、十六疊の西洋間、天井は高くして低く學生燈を吊るし、床は階上に在つて密に絨

氈を敷き、正面の腰高き硝子窓に青きカーテンを垂れ、窓の傍に對つて大なる讀書用のテーブルを据置き、机上に數冊の洋書を半ば開らきて所々に書入たる朱字を示し、墨壺に立掛たる洋筆の濕り未だ乾かずして主人が今迄も之を驅り使ひたるを現わす、傍わらに更らに一脚の廣ろき机ありて、顯微鏡二台、解剖刀數本、藥瓶五六、薄硝子數枚、草花一叢、虫卵一塊、秩然として各其所ろに扣へたり。右手の棚には二百餘卷の洋書籍類を分つて堆だかく積まれ、左手の棚には、昆虫魚介の精油に浸したるもの、又は遠方珍奇の花葉を壓葉にしたるもの、溢るゝ計りに納められたり。室内の樣子如何にも當主人公の學に耽るを寫して餘りあるに、只見る、机に對し優然として椅子に腰打懸たるは、風采の甚だ温雅ある一人の女性なりき。

齢太たく老けて見ゆれども此は學問執心の爲にして實際は尙ほ二十一二なるべし、色の非常に白く見ゆるは元とランプの光に映ずる爲ならんか、左りとて亦た並々ならぬ容色あり、髪は高く束髪に結んだれども、前髪鬢毛ふさ〳〵として風にたゞよひ、額少しく廣ろく口元きびしく締まり、頬肉稍や落ちて甚はだ衰弱の姿たあり、眼光の時にきらめき時に濺むは憂鬱の質あるゆへか、兩唇相接して斷えて齒を現はさゞるは未だ嘗て笑わざるに似たり、端然として倚り、首べを垂れて深く案ずるとき、杳々たる靴音次第〳〵に下より近づき、戸前に至つて止まる。

戸を叩く音數點、プリース、イン(請入)に案内せられて、入り來るは、半白の長髪肩に懸り、鬚髯長く胸を覆ひ、躰姿枯瘦、風采冷凜たる老紳士なり、双の大眼鏡平らなる鼻上の左右に掛れば、嚴烈なる眼こは之より覗いて鋭光を送る。立つて迎へたる女性を冷澹に一見して、戸を後ろに閉ざし、默として其儘傍らの長椅子に腰を下ろし、老人然、プロフヘッソル(教授)然として靜かに口を開き、

哲、どうだ。

ハイ、只今漸と調べました。

分つたか。

漸やく分りました。

それでは今夜それを試驗するとして、願書の指令が來たよ。

願書、此願書とは哲が滿腔の學力を筆端に洩らして之に副へ、全心の希望を置いて大學總理に奉呈したる、即わち大學入校の許可を請願したるの願書なりとす。哲は密かに預想したり

き、何如に古來未だ例しなき事なりとは申せ、彼の論文を公平に御覽ぜられたるものは、定めし其の論文の作者に多少の望を置き、之が學生と爲つて其學を研究するの願ひを聞屆けられんと、固より論を待たず、左れバ入校を許すとの指令は最早授けられたり、恐らくは其の指令に副へて感賞の辭ばあるべし、其の辭ばは果して何如なる言ぞ、今は只之を聞たしなど妄想したれば、元來微塵毫末も入校の許可せられざるとを念わず、頓かに動氣を打つて叔父の面を見凝たる、其の眼この想像は既でに鵠を外れたり、

何んと申して許されましたか。

ナニ許された、チバー〳〵(決不然)、却下せられた。

却下……、あの願書が却下せられまして、而うして何んと申して……。

只だ聞屆け難しとしてある計りで、外に何とも無い、哲、モウ仕方が無いぞ。

イエー、夫れはマア何故で御座いませう、大學は學問を敎ゆるの場所で、尤も高等の敎育を與ふるの場所で、而して此の熱心なるスカラー(研究生)の入學を拒むとハ、一躰何故で御座いませう、論文を見て下さらなかつたのでせうか、論文の主意が分らなかつたのでせうか叔父さん、何故で‥‥何故で御座いませう。

コレ〳〵哲、詰らん奴ジヤ、大學に這入れぬのが何でソンナに悲しひのか、大學バかりが生物學を研究するの場所ではない。

デモ何故に拒みますか、其理由が分りませんから、申しますので。

お前が女だからだ、日本の大學は未だ女の高等敎育を贊成しない、獨逸と同じとだ。

女だから‥‥チエー女だから‥‥見よ〳〵女あれバとて何故に男子に劣りませうぞ‥‥何故劣りませうぞ‥‥日本の男子は‥‥大學は‥‥未だ斯く計り吾々を輕蔑するか、チエー口惜しひ日本男子‥‥‥

老人は眼を据へてヂロ〳〵と見遣り、片頬に極めて潛みたる笑ひを含んで、更らにギヨロ〳〵と見凝め、

夫だからお前に言ふとだ、今ま此の輕蔑を打破るには、女にも之れ丈けの事が出來ると云ふとを見せるが第一だ、其任に當るはお前の外に無い、ナンノ大學ばかしが學問の場所でない、失望しては行かんぞ、いよ〳〵勉强せい、

一躰私が大學にすゝめたのも、お前の學力を教授の仲間に知らせて、先づ大學内に女の力量を感服せしめ、夫から廣ろく及ぼさせようと云ふ計りで、お前の學問の方法の爲では無つたのだ、モゥ仕方が無い、矢張り茲で研究して、書物を書くが善い、一層に勉强せい。

致します、確かに致します、同胞の權理を伸ばして、後來幾百万の姉妹の爲に、自由の道を開きましたらば、實に喜ばしう御座りませう、只だ斯樣に失望しまするも、矢張浮世の名譽心がありまするからの事で、信仰の足らぬゆえでせう、神に祈つて强くなりませう、必らず致します、叔父さん。

叔父は、眼光を輝かし、頗ぶる冷嘲の躰にて、

ハヽヽ、まだ神の事を云ふのか、古くさい信仰など云ふ迷ひを止めなければ、迚もサイエンス(學術)は出來んテ、神とは自然力で、信仰とは未だ試驗を經ざる空想の事だ、決して間違へては成らぬぞ。

○さすがに双紙　美妙齋主人

第七篇(上)。

毎回目先がおなじやうで御氣の毒ですが、昨日の不慮以來物思の裡に一夜を過して詰朝となつた時子父子は朝飯がいりに昨日の事を如彼如此と口說くばかりです。「どうも花房の樣子が凡ぢやァ無いと思ッたが、まッたく栗殼の一條で拘引されたのであらう」。これだけの判斷は疑も無くつきましたが、しかし思へば思ふほど花房が實にその樣な惡事を爲たかどうだか、その邊がますゝゝ訝かしくなるばかり。たゞこゝに尤も意外なこと即ち父子が花房と一途に函根から歸ッて來たとき同じ汽車の中に乘つて居た處の探偵掛その者が快くも花房の樣子に目を留て嫌疑を掛たとは流石の父子もたしかに心注ませんでした。けれど幾分か其考も全く起らなくもありませんが、はじめは只外の苦勞に心を奪れて居ました。其内に時子は思餘り、正鵠といふ見得で父親を見詰め、

「全躰これはあの兒玉さん(探偵掛の名)の、何か、指揮ぢやムいませんが、ねエ、?　妾もあの時一寸左樣思ッたのですが、ねエ、あの方は大變に花房さんを瞻詰めて居ましたよ。全躰なぜあの人は栗殼に御用があるのですねエ?」

「なぜ用があるか」、父親は答ました、「そりやァ他人の權内にある話こッちで知筈は無が、なる程左樣御前が言へば

左樣だつた、よく花房さんの樣子を見て居たが」....
沈吟じて身をたてなほし、
「全躰乃公が紹介しなければ好かッたなア」、
「左樣です」と言はぬばかりの躰で時子は下を向きましたが、暫時經ッてまた顏を上げ、
「しかしたとひ兒玉さんが何う爲さいましたッて花房さんに何も暗い御覺が御有ンなさりさへ爲ませんければ‥どうも御樣子は變でしたが、不斷からのあの御氣性、だからしてあの人が大膽な罪などは」....
「どうも乃公も左樣思ふンだ。こりや嫌疑にちがひ無ささうだが‥またしかし花房さんの樣子も變だッたし‥だうも何だか薩張わからないなア」。
「困ッたことになりましたねヱ。それだからと言ッて默ッてばかりも居られません、何の仔細も正さないではどうも心が安まりませんから、ねヱ、阿父ざん」....
何か希望が有るやうに言ひながらまた考へて迷惑さうな顏をし、
「新聞に出ましやうか知らん」。
「左樣さ、否だなア」。
「出ましやう、ねヱ、本當に?」。
「しかたが有るまい」。
いよ／＼究した顏付でそれから、無言で居ましたが屹と思付いたのは例の兒玉といふ探偵掛は時子の學校友だち淸子といふ者の兄で、而も淸子はまだ兄と同居して居る事です。函根へ行つたこのかたまだ淸子にも逢なかつたが幸無沙汰見舞かたがたそれから淸子を音信れたらいくらか委細も知れやうかと考付いては心も急迫り、その趣を父に告げると是も同意しましたので‥百忙中にも一間箪‥直に鏡とにらめくら直に水白粉の早染紺夜、御化粧も出來上つてやがて一人で出掛けました。
行く途々もたのし氣に見える人が羨ましく、是から百年の固を爲やうといふ人の厄難には我身ばかりが露ふかい秋を受けたやうで、目の觸れる所のものは悉く皆斷腸の種です。兒玉の家は芝公園地内辨天池の傍です。松原へさしかゝつて抽出でた松を見れば、緣は少いですが、「喬木風に折る〵」といふ古語も思出され、またたとひ究厄に陷つたにもしろ一旦意氣が相合つて契約だけは結んだものを、及ばぬながら此處で日頃見もし聞きもした所を實際に取行ひ、庶幾くは操の色

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

にも因で天晴烈婦と言はれるやうに爲りたいとも思ひます。さうなればまた歩きながらも千萬の感情が湧いて來て蟬の聲も寺の鐘も更に耳に入りませんでしたが

しかし志の傾いて居る處へは一點張に鋭いもので丁度自分と通りすがッた二人の紳士の爲て居た會話が、實にその會話ばかりが、感情に包まれて居る鼓膜を穿ッて大礟のやうに轟きました。

「その花房といふ男がそれぢやァ罪人なンですね？」「はァ、栗殻といふのを殺して仕舞ッた」‥‥

通縋ッた瞬間の言語ですから是だけしか聞えませんが、時子の胸の轟は何とも譬様がありません。いッそ紳士の後について何を言ふか聞いて見やうかと一度は足も止まりましたが、また思返すとはなしに思返して居るうち紳士は蚤くも遙の方へ行過ぎて仕舞ました。

「して見ると花房さんは栗殻さんを殺たのか。　ま、どうしてあンな優い方が‥‥今の人は何だらう。是ぢやァどうしても此事が世間へ傳らずには居まい。はて大變にあッたなァ」。

流石に淑女の常として他聞を太く恐れるゆかしさ、心根をおもひやれば實に可哀相です。やゝ松原も通抜けて兒玉の家を音信れると打よく淸子も家に居ました。

素より馴れた間がらゆゑ、別に取次をも經ず、裏口から枝打戸を入ッて直に淸子の便室に上ると淸子は丁度今何か和文の物を見て居たところでした。

「兒玉さん御機嫌よろしう‥‥」時子が先へ口を開きました、「まことにしばらく‥‥御無沙汰を」‥‥

「わたくしこそ御無沙汰‥‥あの御父樣も御歸になッて？」

「一途に。しかも昨夜よ」。

そろ〳〵言葉がくづれて來ました。

佳傳

○魯國の孝子エリサベッス、ロプウロッフ孃（其一）

ロプウロッフと呼れたる魯西亞の士官或時無實の罪にて柴伯亞に謫せられ最と淋しき山里に其餘年を送るべく罰せられにきロプウロッフ氏は妻子を携へて其地に移りしも固より流罪の身なれば貯とては絕てなく只日々の暮しとて政府より六スト（一ストは一フランの二十分一なるを以て我壹錢三厘に當る）宛を與へられからくも細き烟を立たりけるはや十四年の春秋を配所に送れども昔に變る身をかこちものうき風土にや

堪へざりけん深き思に伏し沈み生たる心地とてはあらざりき去る程にエリサベス孃は幼心にも父母のいと幸なきを悲み思はぬ日とてはなかりけるが或日ふと心づきて聖ペテルスブールに赴き自ら父の寃を天子に訴へんとぞ思ひける。

聖ペテルスブールとは名にしおう魯國の首都にてバルチック海の濱にあれば今ロプウ、ロッフ一家の悲に沈み居る柴伯亞の片田舎よりは千餘里の山河を隔つるとならん然るに家は少しの貯ひなき身なれば兎やせまじ角やせんと思へども謫流のつれなきに是ぞと謂ふべき手術もなかりければ唯此の上は一と筋に神の恵をのみ賴みて我思を遂げんとぞ思へ定めけるされど初の程は獨り心にのみ思ふて親にもそれと告げ得ざりけるがさてあるべきにあらざれば或日思ひきりて父に向ひ父よドーゾお願で御座いますからあなたのお赦を願に都まで參りとう存じますドーゾお許しくださいませ妾は神の恵にて必ず願が協ふと存じますと謂へけるに父は此の言葉を聞きて笑ひながら娘の手をとり折節午飯を調へ居たる母の方へと導き行てをまい善きしらせをお聞きモー我々の不仕合も長ひとはあるまいごらん此のえらいお方が我等の爲に都に上り天子に御赦を願ひくれるとよといひけるがさすがに母は女の身なればさまでヒヨウゲもせでそんは阿呆らしいとを言ふよりも自分の仕事をする方がよかろうといひしものゝたらちねの親子の情なればチロ〳〵と泣き出せし娘の心を吸みとりて堪へずやありけんホロリとこぼす淚をゝさいわざと笑顏をなし布巾を取出しなから慰めてサーまずお膳を掃除して其後でゆつくり上京のとをおしたくなさいとぞ言ハれたりける。

エリサベス孃はかく兩親より笑はれけるを見て其後は此目論見を話し出さゞれども心に思はぬ日とてはなく朝な夕なに神かけて父より旅立の許しを得んとをのみ禱り居たりけるかくて三とせを過ぎ去りて我身もはや二九の春に遭ひければ預ての望みを果さんと又折々に旅立の許を乞ひ請たるに始めと違ひて父母も嘲けり笑ふとなけれども兎や角といひなだめて其の企を停めさせんとて勉めけるされど飽まで請ひ求めて止まざりければ終に父母の許を得官より通行券を求め門出の禱をもすませ愈〳〵發足をばなしたりける。

遙るけき路の獨旅なるに貧しければ旅費とても多からず僅に五六フラン（一フランは我二十五六錢に當る）の銅貨を身に纏ひて勇む心を糧となし信ずる神をば伴とも見しるべともたよりける心の程こそ憐れなれされば エリサベス孃は幼心の一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

筋に旅路には上りしも得もいわれぬうき苦勞を甞めいとも畏しき危難をば蹈みたりける。

かくも遙けき都にしあればたどり行くべき道さい知らで行きこう人ゞ問ぬるも皆痴なる者となん思ひて笑わぬ人とてはなかりきされは屢々路に踏み迷ひて空しく旅路をぞ增たりける況して柴伯亞の砂原といひウラルの山坂といひ世の常ならぬ旅路なれば勞るゝまゝにどことも定めず鄕人のなさけを請ひて一夜の宿を求めけるされど世はさまぐのものにて親の爲とはいひ人の檐下にたゝずみて袖乞する悲しさに或時は乞食と呼ばれ或時は非人と嘲けられつれなき袖を涙に濕し追出ださるゝもあれば或は其悲しき涙に心を動かしやさしき擧動にいとゞ憐れを催してむごく取扱ぬるを悔ひ呼ひ戻して一夜の宿をかすものもありき。

或夜劇しき嵐に吹き襲はれて森の樹陰に雨宿を求め風の寒さを防かんとて高き叢より取圍まれたる樅樹の下に身を潜め憐れにも一夜を此處に明かし雨びたしにぞなりにける明日に至れば寒さと饑とによりていたく勞かれ衰ひ泥にまびれて或る村里のとまやに至り情ある人にいたわられけれども終に病みつきて此處に數日をぞ送りける。

又或時犬の群に吠へ圍まれければ驚くまゝに杖取あげて追ひ拂はんとせしも却て犬の怒を激し衣の裾を噛み裂れければ今は只ひたすらに神の援を禱りつゝ大地にドート伏し倒れけるに孃の運や强かりけんかくまで恐ろしき犬供頭を垂れて孃の頭を嗅ぎしのみにて少しのけがもなかりける幸にして里人の通り懸りけるによりて難なく其處をば過き去りにき。

或日氷の張りつめたる澤邊を過り路迷ひ漸くにして一ときは樹立の茂き所に辿着きたりけるに日も早や暮あん頃なりければ恐れをのゝき居たりけるに不意に後の森に聲ありて五六人顯はれ出でけるか皆獰悪なる山賊にて齊しく此方に走りよりすごき顔色にてにらみつけ聲あらゝげて此處へ何に來たと問かけられてエリサベス孃は身の毛もよだち齒の根も合はず漸く聲顫はして妾は柴伯亞の中部より參りましてこれから都に上り父の赦免を天子に歎願致さうと存じますと答へければ山賊等は驚きかくまで遠き旅路なれば定めて多分の路用あらんと思ひけるに孃は其時倘ほ所持したる一二の銅貨をば示しければ山賊等も其憐れなる有樣に氣も挫け唯に悪事を働らかぬのみならず食物さへ分與へて行べき路筋をぱいと懇に敎へ示しける。(未完)

寄書

編者は先月末より顔に腫物を生じまして後ち之を切斷せられしよりは今日に至るまで不斷繃帶を覆ひ居れば只だ一の目にて物を見るの次第心氣快々としてついく編輯に怠る所多く甚はだ心配いたし居ます然るに此間だ毎々皆様より深切なる書狀を頂戴して一層心苦しく思ひ候中にも當年七才及び九才の女友二子より送られたる文あり玆に之を掲げて生が大なる喜を表す。

最愛する兄さん 昨日はあがりましておせわになりましてまことにありがたくをれいを申ます三人でいつでもさむしいさむしいといつてばかりをりますろしておむめさんがひばちのまへであなたにいただいたほんをよんで をりますし またおとよさんはもこうのほうでなにかしてをりますから私もなにかしようと おもいましてもなにもすることがござりませんからかんがいごとをすればそこいらがしんとしていてじつにさむしうございますまた三人があつまつてあなたのおはなしをしていてそれがすんだらばまたさむしくなりましたからあなたのところへおてがみをかきましたそしてあなたのをできをだいじになさいましキスをおくりますここでふでをとめます

Good bye My dear dear brother

form yetsu

九月十日　　　　　　ゑつ子

最愛兄様

さまがちがいましたからごめんなさい

最も愛する御兄上様あなたのあたまできてるものわいかがでず私はながく手紙をあげないでごめんなさい私はあなたの手紙見て誠によろこんで居ります兄上様さしんをくださいあたまいできているものがなをつたら學校へいらつしやい兄上様へんじをください此きたない手紙ですけれどもごめんなさいよ他人に見せてはこまります

九月十一日　　　　　　とよ拜

最も愛する兄上様

新報

(此欄内自由に轉載を許す)

○洲崎新遊廓開業式

洲崎新遊廓の開業式を、去九月一日より執行し、上み總理大臣より以下、多くの官人士君子を招待せんとの計畫夙とに、吾人の耳に入りしかば、吾人は女學雜誌第百二十二號の社說にて太たく之を非難したり、洲崎に於ては、夫是大に故障ありて、漸く去る十五日以後三日間、所云る開業式を執行したり。警視廳東京府の官吏數名、之を巡視し、二三の新聞記者探報に趣かれたる外か、兼て風聽したる人々は一人も之に招待せられざりしを見て、吾人は大慶の至に堪へず。蓋し遊廓の事は、君子の輕々しく口にだもすべきものに非ず、况んや之を筆にして公衆に示すをや、吾人は遂に止を得ずして吾紙面を汚がすの不幸に會したれども、今ま此吉報を以て之を淸了し得るは、切に感謝する所のもの也。

○婦人獻上

右の如くに題して、前號に掲げたるものは、事實無根なりとして申込あり、實否は知らず、苟くも眞に之なかりしとせば、吾人の喜び何物か之に及ばん、則ち深く慶賀す。

○レース傳習所　今度本郷區弓町二丁目一番地普及福音敎會内に設立せられたるレース傳習所は獨逸協會敎師ドクトル、ヘーリング令室警視廳雇ヘーン氏令孃及壹岐坂會堂牧師シュミデル氏令室の專ら發起せるものに係り我國の婦人に一の有益なる業を授けんとの旨趣にて何人にても專らレースを業となさんとするものには無月謝にて敎授し又其傳習に要する物品器具等は一切貸與し又其レースの出來上りたるものは適當なる代價にて買上る等傳習を受けんとする婦人には可及的の便益を與ふる方法なり有志の御婦人方は駿河台鈴木町七番地シュミデル氏方へ申込むべしと又レースは歐米諸國にては專ら貴女の粧飾として廣く一般に行はれ其價貴く其需用多く婦人の業としては最も有益の業なるが嘗て聞く獨逸のザクセンのエルツケルゴルゲーと申す地方は之と云ふ物産もなく極めて貧窶の寒村落なりしに今を距ると凡そ三百五十年頃其地の鑛山長某の妻にバルバラウントマン氏と申す婦人あり始めて此地にレースの業を傳習せしより凡そ五十年を經たる頃にはレースは其地の一大物産となり其民を潤はし其地を富ましたると莫大にして爲ユ其寒村も富饒の地と變じ今日に至るもレースは其地の名産となりエルツゲビルゲー氏の餘澤は今尙ほ儼然存すと云ふ近年のとなり其地の有志者相集り永く該婦人の功を傳へん爲め大理石を以て其肖像を造り之を其地の紀念標と爲したりと云ふ。

○東京女學　芝區兼房町なる同校は日增に盛大に趣き從來の校舍は手狹に付き此度芝區南佐久間町二丁目一番地へ移轉し一層校務を擴張せんが爲め從來の規則を改頁し音樂科にはミス、カクラン英語科には伊藤まさ子經濟科には文學士杉江輔人氏書學並に漢學科には水澤つぐ子等諸氏を聘せられたる由。

○井上伯夫人の寄贈金　同夫人は在布哇國日本人共濟會設立の美擧を贊成し金若干圓を寄贈せられたる由。

○叙任　正七位園祥子には去る十五日を以て正六位に叙せられたり。

○愛媛尋常師範學校女子部　同縣にては本年始めて女生徒を募集し先頃縣下各地に於て試驗を執行せられしが七十五名の受驗志願者ありて内二十五名及第せりと云ふ。

○福岡尋常師範學校　同校にては女子部生徒二十五名中一二の欠員も有之由なるが二十二年度よりは更に十名を增募すると云ふ又兼て新築中なる同校寄宿舍は愈よ落成し本月二十日頃には移轉する樣生徒一同に通知ありし由。

○福岡英和女學校　同校は去る十日を以て開校式を執行せり尙ほ當日の摸樣を聞くに贊美祈禱を以て開會し校主飛鳥貫次郎氏開校の意を述べ續て澁谷微十氏の演說及び生徒諸氏の祝詞朗讀等あり右了て晩餐の饗應ありて散會せりと而して當日の重立ちたる來賓は學務課長を始め書記新聞記者等無慮二百餘名なりしと云ふ。

○福島師範學校女子部　同校にて生徒の服は一同洋服を給與する事となり目下調製中の由なるが冬服一組の代價は二十圓なりと云ふ。

○山陽英和學校　岡山縣上道郡門田村に新築中なりし同校は既に落成せしに付き來る十月一日より授業を始めらるゝと云ふ。

○松山婦人會　同會は去る五日を以て松山西堀端町勸善社に於て月並會を開かれたる由。

○婦人教育會　上州前橋曲輪町なる同會は去る九日午前九時より例會を開き屋代綾岡野いね兩子並に立花内匠氏の演說等ありて午後三時に散會せりと云ふ。

○婦人農談會　雲州鹿足郡藏木組に農談會を開きし節出席者中の一人が組内各村に於て每月一回婦人農談會を開かんとを發議せしに忽ち滿場の贊成する所となり遂に之を開設するとに決せしと云ふ。

○盛岡婦人會　同會は去る八日午後一時より盛岡吳服町桐屋に於て開會しミロル、豐岡、加藤等諸氏の演說ありて四時頃退散せりと尙ほ次會よりは裁縫の實地稽古を催ふさるゝと云ふ。

○秋田婦人矯風會　同會の委員諸子は非常の奮發を以て會務を擴張せらるゝの目的にて目下頻りに盡力中なりと云ふ。

外部

（此欄内自由に轉載を許す）

○料理女學校　英國に於ては此類の女學校特の外評判好きとと見へ或る學校にては千八百七十四年（十五年前）より此方にて凡そ三萬五千の書生に教授したり又或る學校にては年に一萬人の書生に教授する由と、米國の新聞に見へたり。

○佛蘭西の離婚　佛蘭西にて前年離婚法を改正したるより離婚の數著しく增したり即ち改正の當年には一千八百の離婚あり二年目には四千、三年目には四千五百あり故に當今は佛國にて千の婚姻あるに付四の離婚ある割なれども都パリス丈に付て云へば千に付四十七あるの割合なりとぞ。之に關して米國の女權者は許すらく凡う保守流の人は云ふ女に自由權を多く與ふれば第一に離婚增加し第二に子供の出産減ずべしと然るに女子を制御する隨分に嚴しき佛國にては其の離婚數斯く比類なき程に多きは何如んと。然しそう單泊には申されぬとなり。

○英國女權擴張案廢棄　曩にワルター、ブライト、マックラーレン氏が議院へ呈出したる「千八百八十八年人民（女子に迄で及ぼして）代議條案」は從來人民(ピープル)と云へる文字の下に只だ男子のみ含まれ居たるを擴ろめ向來女子と均しく代議員撰擧の權を與へらるべしとの發議なるが此頃の會議中去七月四日遂に廢棄せられたる由なり。

○印度の女子　右のマックラーレン氏は更らに又た英領印度の女子に對する梅毒撿查條例及び妓樓公許等の禁止案を呈したり蓋し英國に於ては彼のバットレル夫人を初めとして女子英國協會（レデース、ナショナル、アッソシエーション）にての大盡力により去年四月彼の惡むべき條例も禁止さるゝに至りしに印度に於ては尙ほ依然として舊法の行われ居るより此の建議あるに至りしなりとぞロバートフホーラー之に贊成しスタンフヘルド氏は元案を維持したるが數時間討論の後ち遂に建議案の通りに可決されたりとぞ、喜ぶべきとなり。

○ウイルラルド孃　萬國婦人禁酒會の會頭ブライトルーカス夫人は老年の故を以て退職せられ向後二年間ミス、ウイルヲルドが代つて會頭と爲られぬ。吾人米國より歸朝の人々に同孃が人と爲りを聞くに何れも敬服せざるものなく又禁酒事業の宏大なるとを驚歎せざるなしウイルラルド孃の如きは女傑と云ふべし吾人は其のいよ〳〵壯健に其の事業のいよ〳〵進步せんとを祈るもの也。

●出版書目　先月中官報を以て廣告ありし書籍の中女學に關するものを擧ぐれば左の如し。

女誡	一冊	著作者 發行者	田中婦佐之 澤田勝助	高知縣
産婆學問答	一冊	著作者 發行者	宮下俊吉 島村利助	東京
高等唱歌夏の曉	一冊		文部省編輯局	
女子必携今世ひめ鑑	一冊	著作兼發行者	關輪正路	青森縣
童女の信仰	一冊	飜譯兼發行者	熊野雄七	神奈川縣
高名大家女子敎育纂論	一冊		内閣官報局	

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

貴婦人會法話　一冊　著作兼發行者　小栗栖香頂　東京
女子穎才集初篇　一冊　著作者　鈴木弘恭　發行者　柳河梅次郎　東京
女子家政學第十三第十四　二冊　著作者　瓜生寅　發行者　辻敬之　東京
新編紫史一篇　一冊　著作者　増田千信　發行者　伊藤岩次郎　東京
新撰女子用文操鏡　一冊　著作者　香川一秀　發行者　花井卯助　大坂
婦人言論の自由　一冊　翻譯兼發行者　佐々城豐壽　東京

小供談

○黄金の鮎

中山由美子譯

ある富裕なる商人ありぬ己れの仲間なる紳商を三十人許り招きて饗應をなせしが此商人の妻は斯る時にはすこしも金錢を惜まぬものにて此時價いと高くて鮎一尾三圓なりしかば之を馳走に出して己れの富裕を客人に知らせばやと思ひて夫にかくと告げしに夫これを止めて言へらく汝親愛なる妻よ吾此魚を購ひたりとも之がため身代に關るべくもあらねどかくては神のとがめも恐しく且此金を持て數多の貧民をも救ふを得べし止みね〳〵と云ひも終らずやがて言葉をとゞめて何やらん考がへ付きたるおもゝちなりしがやゝありて再び言ひつる樣今止むべしと言ひたれども聊か思ふ處あれば汝の望のまゝ鮎をば出すべしさりながら酢と油をば用ふるなかれ去れば我々汝に其用意を教ふべし來れと云ひつゝ何かは知らず言ひ付け居りしが妻は夫が心を悟りけん俄に笑を含みてうなづけり兎角する程に飯の用意もできて皆々設けの席に付き早や配膳も整ひたる頃蓋をなしたる皿とおぼしきにのせてもて來るを主人とりて客人にむかひ云ひける樣此品は荊妻より貴君達に進らする黄金の鮎にて候いざ皆々此品をめし給われと云つゝ蓋を開けば思ひきや魚にはあらで三十個の光りたる金貨なりけり其時主人は再び客にむかひ語りたるやふ此品は我等夫婦の心付ぞかし其故は貧しき人は粗末なる「パン」をだに得くらわで寒きめ見るを我々身をあたゝかにし錦を着て是等を憐れまざれば神明の罰をや蒙むらんされぱこそ斯くは取計ひたるなりねがわくは貴君方は此金貨を持て彼の貧しき人どもを惠み給はれかし去れば我が面目之れに優るなしいざ取り給へと云ひければ客はみな〳〵主人の取計ひに感じて異口同音に述る樣我々どもはいと御意をめづるなりされば又各一つの金貨を出しもて貧しき人に施さばやと思ふあり去れば彼等は必ず今日此主人の饗應をめでたき事と思ふなるべしといわれたりとぞ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

新婦人第一號

祝詞（税所敦子）**社説** 發行の主意 **論説** 女子教育の方向（棚橋絢子）○新婦人發行を聞きて旅中の感を記す（文學士土子金四郎）

學藝 家政學（帝國大學教授…下）○育兒法（帝國大學鬼溪居士）○理科○美術○世態一斑○徒然艸講義（鈴木弘恭）

文學 長歌及文章○和歌數首

賢婦傳 メーリー、ウオルトレー夫人の傳

小説 夕立（紅於）花薄（秋櫻）

批評 女學雜誌の男女交際論○南海先生の婦人論

雜錄 なる時に面白き奇事雜…

部十數件○○○○九月廿五日第一號發兌

廣告料一回一行七錢○○一部定價八錢全國無郵税

發行所 東京麹町區飯田町三丁目十番地 **新婦人社**

特別廉價豫約廣告

約千部限●豫約前金豫約期限九月三十日迄●製本配達十月廿五日より着金の順序にて配達●配達賃は當府外に限り通じて八錢●二錢郵券御送付あれば見本呈上

東京本郷區金助町四番地 英學新誌出版所

いろは引 和英新辭典

大原…編纂

●定價金一圓廿錢●豫約特別價七十錢 滿期日に至れば定價に復す 一冊書齋に備へ英語を正則に學ぶに當り座右に欠くべからざるの良師友なり

移轉及生徒募集廣告

本學生徒增加し從來の寄宿舍其狹隘相成候に付今般左の所に移轉し一層規模を擴め規則を改良し更に別科として音樂開修科を設け學士講師數名を増聘せり依て寄宿通學共百名入學差許候間本月三十日迄に申込むべし

芝區南佐久間町二丁目一番地

私立 **東京女學**

編物（レース）傳習所

第一 當傳習所ハ專ラ編物（レース）ヲ教授スト雖時宜ニヨリハ其他ノ手細工類ヲモ教授ス可シ

第二 當傳習所ノ生徒タラント欲スル者ハ十四年以上ノ女子ニメ後來「レース」ノ業ヲ以テ職ト爲サント欲スル者ニ限ル

第三 授業料ヲ要セズ又傳習ノ爲メ用ユル物品ハ總テ之ヲ貸與ス可シ

第四 無斷欠席三度以上ニ及フ者ハ謝絶ス可シ

第五 出來上リタル編工物ハ當傳習所ニ買上ク可シ但シ其價ハ別ニ定ムル所ノ表ニヨルベシ

第六 有志者ハ毎水曜日午後二時迄ニ普及福音教會壹岐坂會堂ヘ申込ム可シ但シ保證狀ヲ要ス

第七 七月ヨリ九月迄ハ休業ス

本郷區弓町二丁目一番地 普及福音教會内ニテ

日本獨逸福音教會編物傳習所

巖本善治編 女學叢書

木村鐙子小傳

定價十錢 郵税六錢

本書は鐙子刀自の傳記にて姉妹方の必ず閲讀せらるべき價値あるものなり

東京々橋區日吉町八番地

女學雜誌社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

交詢案内

（催促する勿れ。郵券十錢添へ詳細に申來れ）

● 雇ひたき方 （甲）

十 教師 府下某女學校にて英語師範學校女子部卒業生を雇ひたき處あり授業時間三時間位にて校内に止宿しても宜しとのこと

十一 學婢 年齢十五六位のもの下女にして茶水の業に從事し傍ら英學編物等の學業に熟ありて給料に差なき者を雇ふ所あり

● 雇はれたき方 （乙）

六 奉公 某女學校卒業生にて學資に困れる故にては何成西洋人宅にて雇人協力勉學傍雇はれたき一娘あり給料にて何地にてもよろし

七 裁縫 年齢廿三にして家内の手助けとならんが同じ家内に技術に堪へれ度き者あり華族方か町家ならば大家のかたき内にて家事の担當ならば通いても宜しとのこと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十二 教師 或師範學校にて普通學三年餘修業せしもの學校に七八圓位にて通勤致したく又は其他の御内にて入込み教授するならば六圓位にて雇はれたし可成は東京横濱の中を望む

十三 教師 一昨年某縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校又は他の御家内にても教授に雇はれたきものあり可成くは[illegible]

十四 洋行 自ら好學なる十八歲位のものにて英語學を可なり出來るものにて學問研究の爲め渡航する婦人の隨從に航せらるゝ御方の小間使ひとなりて洋行を願ひたし

十八 召使 年齢十四五才のものにて學資に乏しく依て小間使となり餘暇に修學をいたさせくるゝ人あれば無給にて雇はれたし雇主可成的基督信者をたのむ

十九 召使 裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居役の者に雇はれたし

二〇 裁縫 年齢十四五才にて華族様か或は官員方の御方之内の小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二三 教師 年齢二十七年東京府女子師範學校卒業生にして或る貴家令孃の相談役を望む者あり

出張教授を望む

壯年にして身元確實品行方正生來**高等の教育**を受け最も獨逸學に通曉する者あり今般御當人の餘暇を以て毎日官員華族若くは其他の令息令孃の御内に獨逸語出張教授仕度候間御望の御方は何卒女學雜誌社まで御通知被下度候尤も時間は午後の内一時間乃至二時間にて報給は八回乃至十二回とす又二人以上御組合にて一同に教授仕りても宜敷候

發兌

九月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日
十月。六日 十三日 二十日 廿七日
十一月。三日 十日 十七日 廿四日
十二月。一日 八日 十五日 廿二日 廿九日

定價

一冊。五錢 郵税。一錢（但府内無郵税）
十冊。四十八錢 郵税。十錢（同前）
半年分 一圓十七錢 府外は 一圓四十三錢
一年分 二圓卅四錢 府外は 二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記事を掲ぐるものにて雜誌一切の料を申受けず但し紙面半頁以上半頁分の廣告は十部を購求するの割合にて定む

一行一回（廿七字詰）前金拾錢
同三回以上 一割引
同六回以上 二割引
十行以上二割引。四十行以上三割引
但し廣告は縮めて引受くる事なし
物品寄贈の廣告は無代にて[illegible]女學雜誌に關係ある本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淺草町殿々堂○同西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同京橋區[illegible]東海堂○同日本橋區[illegible]○同京橋區本挽町四丁目文[illegible]○[illegible]○大坂[illegible]○仙臺[illegible]○熊本文明堂

明治二十一年九月二十一日印刷
明治二十一年九月廿二日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 巖本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHO, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY